

群 教 セ	E03 - 01
	平23.243集

互いに認め合うことができる 学級づくりの工夫

— 生徒のよりよい人間関係を構築するための
自作「学校行事ノート」の活用を通して —

長期研修員 小川 昌美

《研究の概要》

本研究では、生徒指導の三つの視点を踏まえた特別活動の指導が進められるように、自作「学校行事ノート」の活用を通じた授業実践を行った。「KJ法」と「概念化シート」による話し合い活動で意見を引き出したり、相互評価による自分自身のよさを認識したりする学級活動を行うことによって、生徒一人一人の自己存在感が高まるとともに、互いに認め合うことができる学級づくりにつながった。

キーワード 【学年・学級経営 学校行事 学級活動 合唱 人間関係 話し合い活動】

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領 総則（平成20年3月）と生徒指導提要（平成22年3月文部科学省）では、学級経営における人間関係を構築する大切さについて以下のように明記している。

- 中学校学習指導要領 総則
教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒が自主的に判断、行動し積極的に自己を生かしていくことができるよう、生徒指導の充実を図ること。
- 生徒指導提要
 - ・学級経営・ホームルーム経営の具体的な仕事として生徒指導が行われると考えてもよいわけです。つまり、学級経営・ホームルーム経営は、生徒指導の推進力の役割を果たすだけでなく、生徒指導が学級経営の重要な内容を構成していると考えられます。
 - ・児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係をはぐくみ、自己決定の場を豊かにもち、自己実現を図っていける望ましい人間関係づくりが極めて重要です。

また、「学級経営の充実に向けて」（平成22年12月群馬県教育委員会）では、学級経営を充実するためのポイントの一つとして「よりよい人間関係づくりに努めること」が大切であると明記している。

現在の生徒は、自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じている。その原因として、友達とのかかわり方が分からなかったり、互いに意見を交換し一つのことをやり遂げたりする経験が少ないことが考えられる。研究協力校においても、自分自身が学級の役に立っているという認識は低い。このような現状を考えると、学級経営を行う中で、自分の意見が大切に扱われていると感じられる話し合い活動の場を設定し、自分のよさに気づき互いに認め合う人間関係づくりの経験をさせることが必要になってくる。

そこで、生徒指導提要で明記されている「生徒に自己存在感を与えること」「共感的な人間関係を育成すること」「自己決定の場を与えること」の生徒指導の三つの視点を生かした特別活動の指導を行い、意図的かつ効果的に話し合い活動を取り入れることで、よりよい人間関係を築くことができると考えた。生徒は、学年や学級の集団の中で、友達や教師と親密にかかわることで、自己存在感が高まる。また、互いに意見を交換する中で自分の意見が友達から認められることによって、自分に自信が付いてくる。さらに、学校行事を通して、互いに協力し、諸問題を解決することによって、社会性が身に付き、友達や教師に対する信頼感が生まれてくる。これらの一連の活動を通して、互いに認め合い、尊重し合う共感的な人間関係が得られる。

以上のことから、特別活動の指導において、生徒指導の三つの視点を生かした自作「学校行事ノート」を活用して意図的な話し合い活動を取り入れることは、互いに認め合うことができる学級づくりにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

生徒指導の三つの視点を生かした特別活動の指導において、自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動や相互評価を取り入れることによって、よりよい人間関係を構築し、互いに認め合うことができる学級づくりを目指す。

III 研究の見通し

- 1 学校行事の事前指導において、自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動を取り入れれば、一人一人の意見を引き出すことができ、自己存在感が高まるであろう。
- 2 学校行事の事後指導において、自作「学校行事ノート」を活用した振り返り活動で、自分の成長を確認したり、互いのよさを認めたりする活動を行えば、自他のよさに気づき、共感的な人間関係が得られ、互いに認め合うことができる学級づくりにつながるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え

(1) 研究の構想

本研究においては、自作「学校行事ノート」を活用することでよりよい人間関係を構築し、互いに認め合うことができる学級づくりを目指していく。本研究の概要・構想は図1のとおりである。

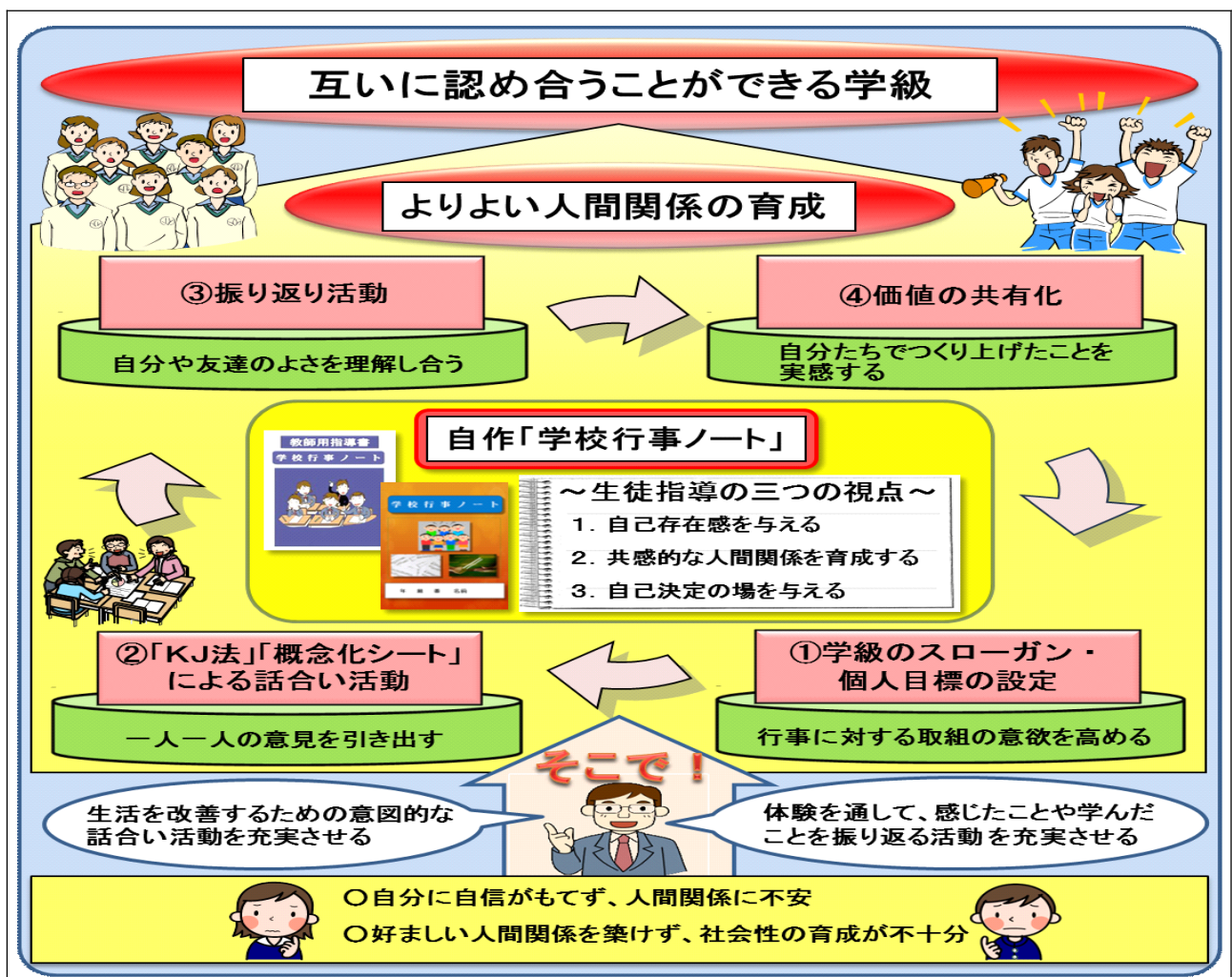


図1 研究構想図

(2) 自作「学校行事ノート」について

自作「学校行事ノート」は、学校行事に対しての生徒一人一人の考え方や思いを記録として蓄積していくものである。また、生徒が話し合い活動や授業を通して考えたことが記録できるようになっており、その記録を見直すことで、行事を通して身に付けてきた力を振り返ることができるようになっている。

生徒は、学級活動の時間ごとにワークシートとして教師から学習内容を提示されるのでは、学校行事を充実させるためにどのような活動があるのか見通しがつきにくい。そこで、生徒全員に学校行事を充実させるために必要な内容を含んだ自作「学校行事ノート」として配付することにより、先が見通せるようになる。

自作「学校行事ノート」は、生徒用(図2)と教師用指導書(図3)がセットになっている。県内の中学校で多く行われている学校行事の「体育大会版」と「合唱コンクール版」の二つと各学校の様々な行事に対応できる「基本版」を作成した。学校行事を充実させ、目標を達成するために、学級活動や学級経営上で必要と考えた活動を一冊にまとめ生徒に配付できるようにした。自分の取組の様子や友達の頑張っている様子を記録するワークシートや活動ごとに振り返りができるようワークシート、「KJ法」や「概念化シート」による話し合い活動の基になる自分の考えが書き込め記録に残せるワークシートなど、成長の様子が分かるよう工夫した。

また、それぞれのノートを活用するための「教師用指導書」も合わせて作成した。なお、教師用指導書には、ねらい、話し合いの手法、指導のポイントが明記されており、教師の参考になるように作成されている。各ページは、生徒指導の三つの視点から学校行事をとらえ直した構成になっている。右の図3は、教師用指導書の中の「合唱コンクールのスローガンを決めよう」の学級活動を行うときの例である。「指導のポイント」と「生徒指導の三つの視点」「展開例」で構成し授業の進め方が分かるようにした。

(3) 自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動について

自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動では、自分の考えをもたせ、一人一人の意見を引き出すために、「KJ法」や「概念化シート」(図4)を用いて話し合いを進める。このことにより自分の考えをもって話し合い活動に望むことができるため、友達との意見交換が活発になり、互い



図2 生徒用の「学校行事ノート」

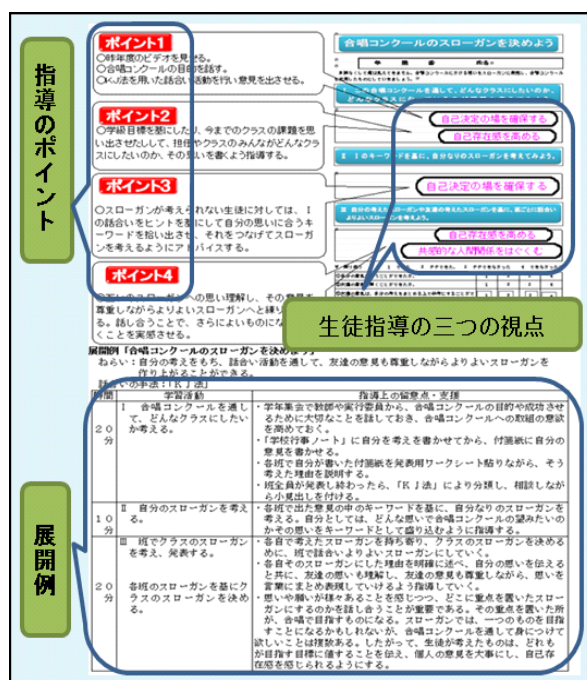


図3 教師用指導書

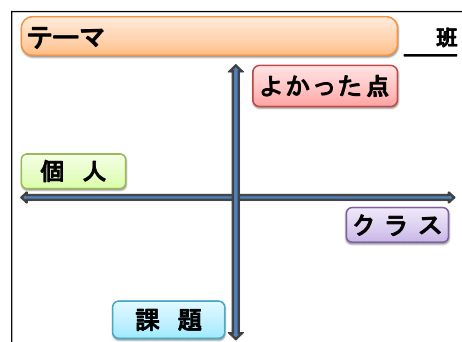


図4 概念化シート

のよさを認め合うことができる。また、自分の意見が反映され、互いに協力し合い、学校行事をつくり上げてきたことを実感できるようになり、自分や友達のをさを理解し互いに認め合う学級づくりにつながっていく。

(4) 「よりよい人間関係」について

本研究における「よりよい人間関係」を以下のように定義した。

- ① 生徒一人一人が自他の個性を尊重するとともに、集団の一員としてそれぞれが役割と責任を果たし、互いに尊重しよさを認め発揮し合えるような開かれた人間関係である。
- ② 一人一人の生徒が生徒会組織の一員としての自覚と責任感をもち、共に協力し、信頼し支え合おうとする人間関係である。
- ③ 生徒が学級や学年を超えた様々な生徒と主体的にかかわる中で、喜びや苦勞を分かち合いながら、共通の目標を達成しようとするなど、共に協力し信頼し支え合おうとする人間関係である。

V 研究の計画と方法

1 実践計画

対 象	研究協力校 中学校第1学年 130名	期 間	9月20日～11月8日
単元名	響き合う合唱コンクールにしよう	指導者	長期研修員 小川 昌美



2 検証計画

研究項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動を取り入れることは、生徒一人一人の意見を引き出し、自己存在感を高める上で有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・活動前後のアンケートの比較 ・「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙(C&S)」の分析 ・自作「学校行事ノート」の内容の分析
見通し2	自作「学校行事ノート」を活用した振り返り活動で、自分の成長を確認したり、互いのよさを認めたりする活動を取り入れることは、自他のよさに気づき、共感的な人間関係が得られ、互いに認め合うことができる学級づくりに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ・活動前後の行動観察、行動比較 ・「KJ法」のワークシートや「概念化シート」の内容の分析 ・「合唱コンクールから学んだこと」や「私が選ぶ、MVP」、「生徒の感想」の記述内容の分析

3 指導過程

活動内容	活動時間	指導上の留意点
○学校生活の実態調査を把握するためのアンケート調査を行う。	朝の会 帰りの会	・正確な調査を実施できるよう、必要に応じて補足説明を行う。
○実行委員会① 「合唱コンクールを成功させるために」	放課後	・学校行事としての合唱コンクールのねらいを確認し、成功させるために大切なことを考えさせる。
○実行委員会② 「学年集会準備をする」	放課後	・実行委員を中心として積極的に合唱の運営に加わり、クラス全員でつくり上げようとする意欲をもたせる。
○学年集会① 「合唱コンクールを成功させるために」	朝礼の時 間を使っ ての学年 集会	・学校としてのねらいを明確に伝え方向性を示すとともに、合唱を全員でつくり上げていこうとする意欲をもたせる。

<p>○学級活動① 「学級のスローガンを決めよう」</p> 	<p>学級活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「KJ法」を用いて一人一人が意見を出し合い、話し合い活動を通して友達の見解も尊重しながらよりよいスローガンをつくり上げる。 	
<p>○個人目標の決定</p>	<p>朝の会 帰りの会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学級スローガンで掲げた目標を実現させるための具体的な活動目標を考えるように指導する。 	
<p>○学級活動② 「響き合う合唱コンクールにしよう」</p> <p>「さらによく響き合う合唱にするための具体的な方策を考えよう」</p>	<p>学級活動</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「概念化シート」を使うことによって、みんなの意見が一目で分かるようになる。具体的な方策が浮かばない生徒もそれを参考にして、よりよい合唱にするための具体的な方策を考えさせる。それでも具体的な方策が浮かばない生徒は、よかった点をさらに伸ばす具体的な方法を考えるようにアドバイスする。 	
<p>○学年集会② 「合唱コンクール直前指導」</p>	<p>学年集会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス集団としてのまとまりが出てきたことや頑張ってきたことを具体的に称賛する。 ・歌う態度や聞く態度について指導し、歌い手と聴き手の両方でよりよい合唱コンクールにしていけるよう意欲付けをする。 	
<p>○合唱コンクール当日</p>	<p>学校行事</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで、生徒が話し合ってきたことや日々の練習のことを想起させ、生徒が自信をもって目標の実現に向けて歌うことができるよう助言する。 	
<p>○今までのよさや今日の頑張りを称賛する。</p>	<p>帰りの会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・結果に関係なく、生徒の今までの活躍を具体的に示して称賛する。 	
<p>○合唱コンクールを振り返り、「学んだことや得たこと」をまとめる。</p>	<p>朝の会 帰りの会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個人目標や学級スローガンに照らし合わせて、学んだことや得たことを自作「学校行事ノート」に記入する。さらに、課題を具体的に記入するよう助言する。 	

○実行委員会③ 「合唱コンクールを総括しよう」のリハーサルを行う。	放課後	・合唱コンクールで学んだことや得たことをどのように伝えていったらよく伝わるか考えさせる。	
○学年集会③ 「合唱コンクールを総括しよう」	学年集会	・合唱コンクールという共通の体験活動をしたとしても生徒によって、感じ方が違うことがあるので、自己認識を友達との比較を通して客観視することができるようにする。	
○学級活動③ 「私が選ぶ、MVP」	学級活動	・自作「学校行事ノート」の「友達の頑張りを記録しておこう」を振り返らせ、友達のよさに気づき広めることによって、相互理解を深める。	
○事後アンケート調査を行う。	朝の会 帰りの会	・今までの活動を振り返らせるために、必要があれば学校行事ノートを見ながら今の気持ちを素直に表現するよう指導する。	

4 授業実践

本研究では、以下のように自作「学校行事ノート」を活用した授業実践を行った。

(1) 学校行事ノートの活用方法

授業実践では、自作「学校行事ノート」を以下のような三つの手順で活用した。

手順1 自分の考えをまとめる自己決定の場を設定する。

手順2 学校行事ノートに自分の考えを書き話合いの準備をする。

手順3 自分の考えを友達に発表する場を設定してから、話合い活動に入る。

このような手順で自作「学校行事ノート」を活用することによって、自分の意見が自作「学校行事ノート」に書かれているため、自信をもって発表できていた。生徒は、自分の思いを友達に伝える活動を通して、自分の考えが反映された話合い活動が行われたと感じることができた。

また、言葉だけで話し合うのでは、記録に残らないが付箋紙を使って話合い活動を行うことによって、友達や自分の考えが記録として残っているため、付箋紙に書かれた内容を基に意見交流することができ活発な話合い活動につながった。

(2) 「KJ法」による話合い活動

「合唱コンクールのスローガンを決めよう」では、「KJ法」を用いて、合唱コンクールを通してどんなクラスにしたいのかという課題を考えさせた。付箋紙を各自に三枚用意し、分類するためのワークシートに理由を含めて順番に貼り発表した。全員が貼り終わった後、班ごとに同じような意見に分類し、小見出しを付け班の代表者が発表した。

(3) 「概念化シート」による話合い活動

「響き合う合唱コンクールにしよう」では、「概念化シート」を用いて、これまでの取組のよかった点と課題を個人とクラス全体に分けて考えた。班は、各パートに分け四人編制で話し合った。パートごとに響き合う合唱に

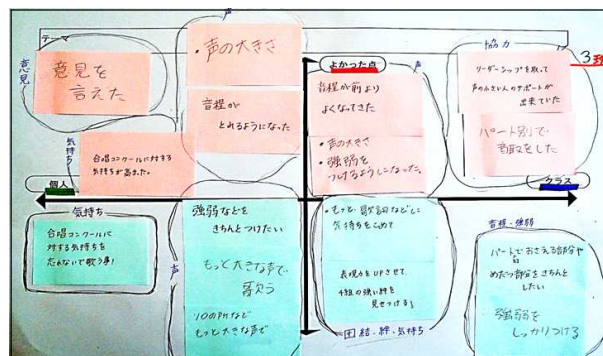


図5 小見出しを付けた概念化シート

するためにはどうしたらよいか考えながら練習しているので、より具体的な方策が身近なものに感じ意欲的な取組になると考えた。よかった点や課題を付箋紙に書き、「概念化シート」に貼る位置によって取組のよさや重要度を表現させた。各自から出された意見を班全員で共通のものに分類し小見出しを考えさせた(図5)。その後、班ごとにクラスの課題として出てきた意見に対して具体的な方策を考えた。そして、集団決定した内容をホワイトボードに記入して発表した。ホワイトボードに記入することによって、クラスに掲示することができ課題改善の方向性が明確になるため、合唱に取り組む意欲が高まった。

(4) 学級活動「私が選ぶ、MVP」による互いを認め合う活動

「私が選ぶ、MVP」は、以下の二つを用意した。

- ① パートごとに友達のよい所を見付け合うもの。
- ② 全体の活動を通して選ぶもの。

①では、必ず一人一人の頑張りを友達が評価できるように事前に誰が誰を見るのかを決めておき、合唱コンクールの練習に取りかかった。学校行事ノートの「成長の記録」に友達の頑張った点やよかった点を記入できるようにし、それを基に、クラス全員のよい所をクイズ形式で発表し、認め合う活動を行った。②は、教師が紹介し、教室掲示をした。

(5) 「合唱コンクールから学んだこと」による価値を共有化する活動

「合唱コンクールから学んだこと」では、「自分自身の今までの取組」「友達との話合い活動やかかわり合いの中から」「クラス全体や学年全体」の三つの観点から考えた。全員の意見をまとめ、実行委員が学年集会で主なものを紹介し価値の共有を図った。

(6) 全体を通して

「学級のスローガンを決めよう」や「響き合う合唱コンクールにしよう」の学級活動では、「KJ法」や「概念化シート」による話合い活動によって自分の意見が認められたと感じる体験をした。そして、学校行事を振り返る活動において、「成長の記録」や「私が選ぶ、MVP」や「合唱コンクールから学んだこと」を通して、自分の頑張りを友達が見ていてくれたと実感した。また、自分が体験したことから学んだことや得たことが友達にも受け入れられたり、共通の認識であったりすることを感じる体験をした。

VI 研究の結果と考察

授業実践の事前・事後に行ったアンケート、さらに、群馬県総合教育センターのWebページよりダウンロードできる「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙(C&S)」(以下質問紙)による調査、自作「学校行事ノート」への記述から本研究の結果と考察を以下のようにまとめた。

1 自己存在感の高まりの有効性について

(1) 結果

図6で示した話合い活動に関するアンケート結果から「友達の意見をよく聞く」という回答は、「あてはまる」が18%から52%と約3倍に増加した。

「話合い活動で自分の考えが深まった」と感じている生徒は、事前アンケートは、「あてはまる」6%で、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせても、51%にとどまっていた。しかし、事後アンケートでは、「あて

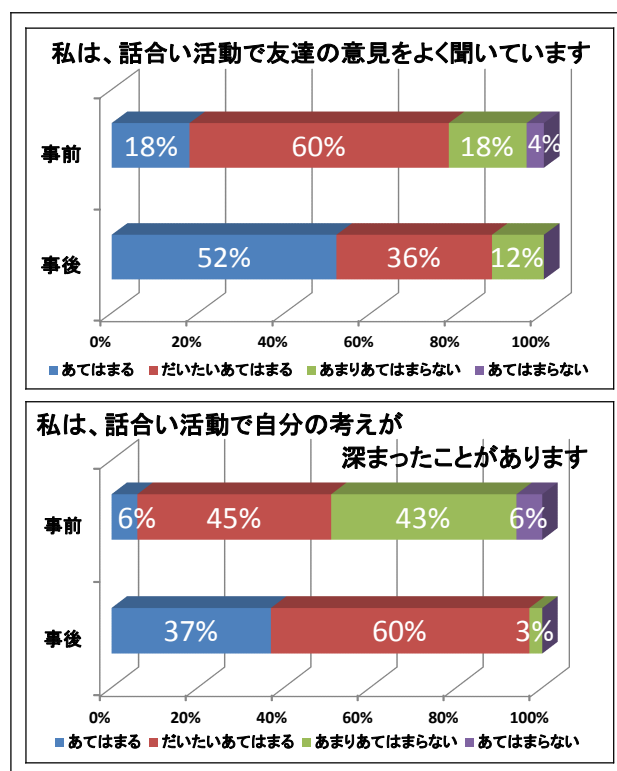


図6 話合い活動に関する事前事後アンケートの結果

はまる」が37%で、約6倍になった。また、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせて97%になり、大きく増加した。

さらに、図7の自己存在感に関する事前アンケート結果では、「私自身の中によさがある」は、「あてはまる」3%、「だいたいあてはまる」42%、合計で45%である。この項目も「クラスの役に立っている」の項目同様に低い値を示している。しかし、事後アンケートでは、「あてはまる」6%、「だいたいあてはまる」58%、合計で64%に増加した。

「クラスの役に立っています」という項目については、事前アンケートでは、「あてはまる」0%、「だいたいあてはまる」33%であり、自分がクラスのために貢献しているという認識は低かった。しかし、事後アンケートでは、「あてはまる」3%、「だいたいあてはまる」58%、合計で61%となり約2倍に増加した。

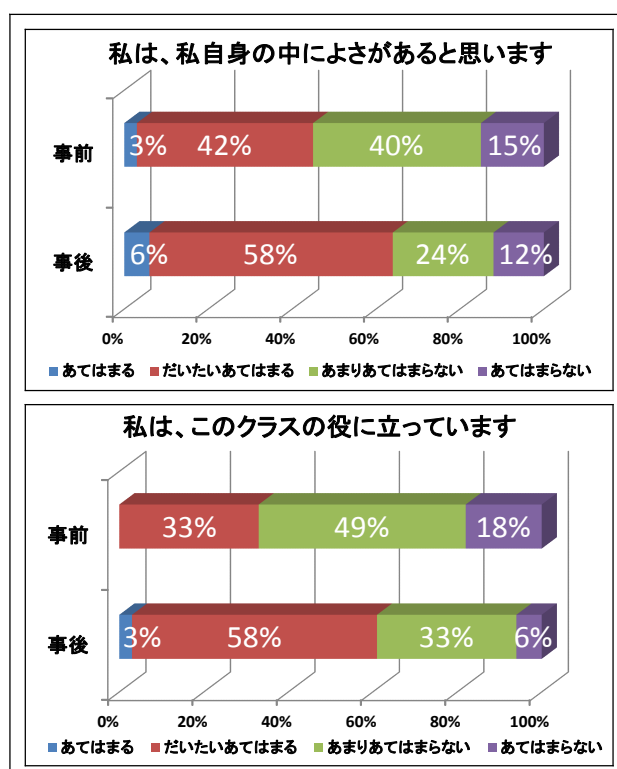


図7 自己存在感に関する事前と事後アンケートの結果

(2) 考察

アンケート結果から自作「学校行事ノート」

に自分の考えを書いてから、「KJ法」や「概念化シート」を用いることによって、全員の生徒が意見を発表する機会を意図的に設けることになり自信につながったと考える。また、付箋紙に書いた意見を話し合いの中で活用することによって、自分の意見が友達に受け入れられたという意識をもつことができ自己存在感の高まりにつながったと考える。

また、一人一人の意見を生かしてスローガンを決めたり、合唱をよりよくするための具体的な方策を考えたりするための自己決定の場を設定したことが、自分の考えを深めるのに有効であった。さらに、自分の意見が「概念化シート」に残り、それを基に、話し合いが展開していくため、自分の意見が尊重されたり認められたりしていると感じることができ、自己存在感が高まった。

以上のことから、自作「学校行事ノート」を活用した話し合い活動を取り入れたことは、自己存在感を高めるのに有効であったと考える。

2 共感的な人間関係が得られ、互いに認め合うことができる学級づくりの有効性について

(1) 結果

授業実践を行う事前と事後のアンケートを比較して見ると、図8の事前アンケート結果から、「友達のよい面を積極的に見るようにしている」という項目については、「あてはまる」が24%で、「だいたいあてはまる」と合わせた生徒の回答割合は、82%であった。それが、事後アンケートでは、「あてはまる」が34%に増加した。しかし、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせた回答割合は、82%で事前と事後では変化がなかった。

また、事前アンケート結果から「友達から認められている」という項目については、「あてはまる」が15%で、「だいたいあてはまる」と合わせた生徒の回答割合は、60%であった。それが、事後アンケートでは、「あてはまる」が21%に増加した。さらに、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせた回答割合は、79%に増加した。

事前アンケート結果から、「友達のよい面を積極的に見るようにしている」と答えた生徒は、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせて、82%で高い値を示している。「友達から認められている」と答えた生徒は、60%であった。この差が22%あった。それが、事後アンケートでは、

「友達のよい面を積極的に見るようにしている」と答えた生徒は、「あてはまる」と「だいたいあてはまる」を合わせて、82%であった。この部分は、事前と比べても変化がなく高い値を示している。また、「友達から認められている」と答えた生徒は、79%に増加した。これによって、差が3%に縮まった。

さらに、合唱コンクールの感想の中に「友達が、私の頑張りを見ていてくれたのがうれしかった」という内容の記述が多く見られた。

「合唱コンクールから学んだこと、得たこと」を1年生全クラスで集計した。一番多かったのは、「友達との絆」であった。次は、「練習の大切さ」、その次に多かったのは、「努力や協力の大切さ」であった。実行委員が集計し、学年集会で発表した(図9)。自分で体験し感じたものと友達を感じたことを共有し認識を広げることができた。成功体験や失敗体験から学んだことを次の活動に生かすよう生徒全体にメッセージを送ることができた。

図10の質問紙の事前と事後を比較して見ると、学級の雰囲気(横軸)の点が全体として右に移動してよくなったことが分かる。自己肯定感(縦軸)に関しては、50より上の人数が増えたが、全体の平均を取ってみると、事前と事後ではあまり変化が見られなかった。

(2) 考察

これらの結果から、多くの生徒は、友達のよさを見付けようと意識しながら学校生活を送ることができるようになったと考えられる。しかし、自分が友達から認められているとは、あまり感じていない。それは、学校生活の中で自分のよさを感じ取らせる場面設定をあまりしてこなかったことも一因にあると考える。他人から認められていると認識するには、感謝の言葉をもったり、ほめられたりすることが必要である。また、自分が頑張っていることがクラスや友達の役に立っていると認識できたときである。そこで、「私が選ぶ、MVP」は、学校生活の中で互いに認め合う場面を意識的につくり出すことができたので、共感的な人間関係をはぐくむのに有効であると考えられる。

「合唱コンクールから学んだこと」

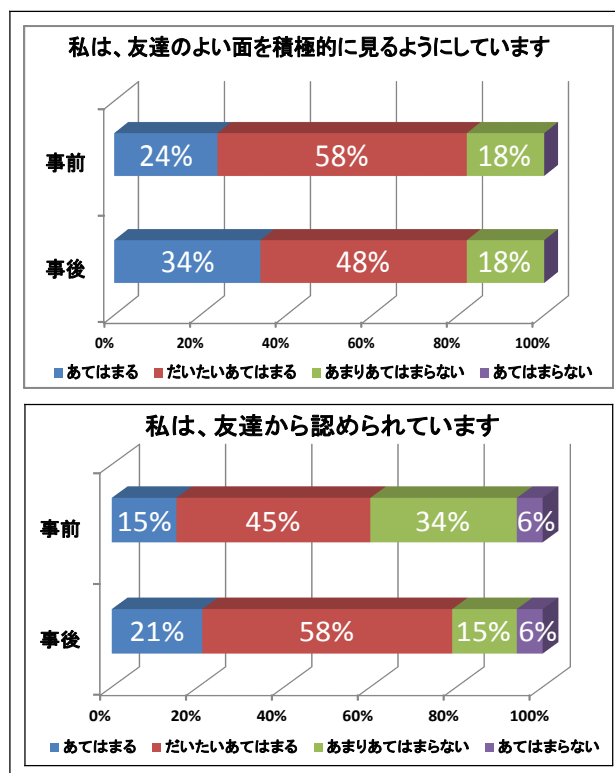


図8 共感的な人間関係に関する
事前と事後アンケートの結果



図9 「合唱コンクールから学んだこと
ベスト3」

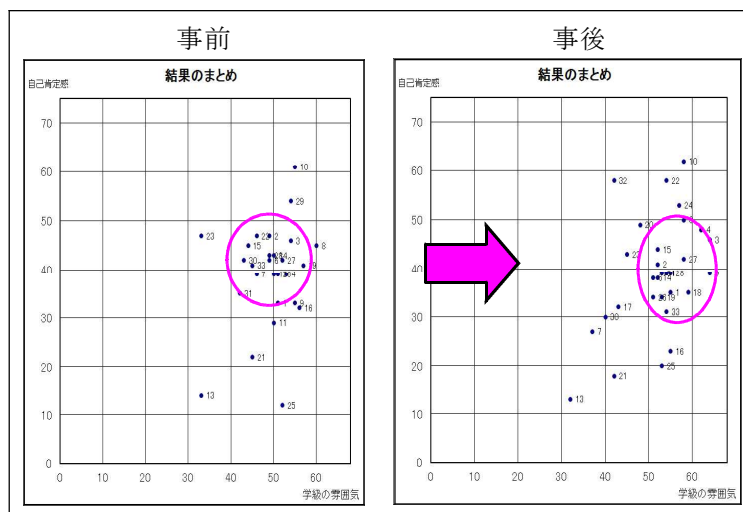


図10 質問紙による分布図の比較

を見ると、多くの生徒が、友達との絆の大切や協力の大切さを学んだという記述が見られた。このように感じる事ができたということは、生徒同士の心が一つになり、みんなでクラスの合唱をつくり上げた充実感を味わった証拠である。この体験から、今まで気付かなかった友達のよさにも気付き、友達からも自分の頑張りを認められたことによって、共感的な人間関係がより深まったと考える。

これらの実践を通して、友達から自分の頑張りが認められたり自分のよさが認められたりすることによって、自分のよさに気付き、自信をもって学校生活が送れるようになってきたと考える。それにより、クラスの中での自己存在感が高まった。

さらに、友達のよさを意識して見ることによって、その友達の今まで気付かなかったよさも見えてきて、友達との関係も良好になってきたと考える。それによって、クラスの雰囲気もよくなったと感じ、互いのよさを認める共感的な人間関係がつけられてきたと考える。また、質問紙の自己肯定感（縦軸）の平均が上がらなかったのは、学習経験を積んでいくにしたがい、生徒が自分を評価する見る目が厳しくなってきたからではないかと考える。

以上のことから、自作「学校行事ノート」を用いて、「私が選ぶ、MVP」や「合唱コンクールから学んだこと」の一連の振り返り活動を行ったことは、自己存在感が高まり、互いのよさを認め、クラスの雰囲気がよくなってきたことから共感的な人間関係が得られ、互いに認め合う学級づくりに有効であると考えられる。

VII 研究のまとめ

1 成果

- 自作「学校行事ノート」における「友達のよい所を見つけよう」の記述だけでなく、明日の予定や一日の感想を書くことができる「生活ノート」にも日常生活の中でも友達の長所を認める記述が日を追うごとに多くなり、共感的な人間関係の育成につながった。
- 学級活動「私が選ぶ、MVP」では、友達から自分のよさが発表されることによって、自分のよかった点を認識し、クラスの役に立ったという気持ちを高めることができた。友達から認められているという感情は、共感的な人間関係をはぐくみ、互いに認め合う学級づくりにつながった。
- 自作「学校行事ノート」を毎日提出させることによって、「成長の記録」に生徒の頑張りが記載されているので、教師は、その生徒のよさを認める声かけができ、教師と生徒の信頼関係を深めることができた。

2 課題

- 自作「学校行事ノート」に自分の考えを記入しておくことは、活動を振り返るのに有効であるが、「KJ法」や「概念化シート」での話し合い活動を行うとき、発表用にまとめる作業に予定より多くの時間がかかってしまった。集団決定や自己決定の時間を増やすためICT機器の活用や話し合いの効率化などを工夫していく必要がある。
- 教師による個別指導や生徒を認める的確な言葉かけ等を教師用指導書にまとめ、生徒一人一人が自分のよさに気付くことできる工夫をしていく必要がある。

<参考文献>

- ・文部科学省 『生徒指導提要』 教育図書(2010)
- ・杉田 洋 著 『よりよい人間関係を築く特別活動』 図書文化(2009)
- ・日本特別活動学会 監修 『新訂キーワードで拓く新しい特別活動』 東洋館(2010)
- ・村川 雅弘 編者 『「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える』
教育開発研究所(2010)
(担当指導主事 小熊 良一)

